

他党（「人民の権利」党＝のちのエス・エル）に対する評価

「人民の権利」党の人々が、彼らとその利益を擁護しようとのぞんでいる当の「人民」や、彼らが決然として信頼するにたる労働の利益の保護機関と考えている当の社会についてもっている考えが、なおまだ、どれほどあいまいなものであるにしても、いずれにせよ、「人民の権利」党の結成が一步前進であること、「祖国のための別の道」という幻想と夢想を終局的に放棄し、おそれることなく現実の道を承認し、それらの道を基盤として革命的闘争のための諸要素を探求することにむかっての一步前進であることを、われわれはみとめないわけにはいかない。ここには民主主義的政党の結成の志向が明瞭にあらわれている。私がたんに「志向」というわけは、残念なことには、「人民の権利」党の人々はその基本的見地を首尾一貫してまもってはいないからである。彼らは、あいかわらず社会主義者との統合と同盟を説いていて、つぎの点を理解しようとしなない。すなわち、労働者を単なる政治的急進主義へ引きこむことは、ただ、労働者出身のインテリゲンツィアを労働者大衆から切りはなすことを意味し、労働運動を無力に運命づけることを意味するのであって、そのわけは、労働運動は、労働者階級の利益を完全、かつ全面的につらぬくことを基盤にしてはじめて、資本の召使どもにたいする政治闘争と不可分に融合した資本にたいする経済闘争を基礎にしてはじめて、強力となりうるからである、ということである。あらゆる革命的分子の「統合」は、個々の利害の代表者を別個に組織するという仕方で、また、あるばあいには、あれこれの党が共同行動をとるという仕方で、はるかによく達成されるということを彼らは理解しようとしなない。彼らは自分たちの党を、いまなお「社会革命的な」党と呼んでいる（一八九四年三月十九日づけの「人民の権利」党の宣言を見よ）が、そのくせ他方では、もっぱら政治的な改革だけに限定して、われわれの「のろわれた」社会主義的諸問題をきわめて用心ぶかく回避している。あれほど熱心に幻想との闘争を呼びかけている党は、その「宣言」のまず最初の言葉によって他の人々を幻想へ引き入れるようなことは、すべきではないであろう。**立憲主義**のほかにはなにもないばあいに**社会主義**を口にすべきではないであろう。しかし、くりかえして言うが、「人民の権利」党が「人民の意志」派から出たものであることを考慮に入れないで、彼らを実評価するようなことをしてはならない。だから、彼らが社会主義になんの関係もない、もっぱら政治的な闘争を、もっぱら政治的な綱領で基礎づけているのは、一步を前進するものであることを、みとめないわけにはいかない。社会民主主義者は、心から「人民の権利」党の成功をねがい、彼らの党の成長と発展をねがい、そして、現存の経済制度（すなわち、資本主義制度——この制度の必然的な否定および、それにたいする容赦ない闘争という基盤に立っていない諸要素。）の基盤に立ち、**民主主義**と実際にきわめて緊密にむすびついた生活利害をもつ社会的諸要素に、彼らがよりいっそう接近していくことをねがっている。

注) 彼ら自身は、インテリゲンツィアの奇蹟力を信じることに抗議しており、人民そのものを闘争に引き入れる必要を説いている。ところで、このためには、この闘争を特定の生活利害にむすびつけることが必要であり、したがって、個々の利害を区別して、そのそれぞれを個別的に闘争へ引きこまなければならない。……ところが、この個々の利害を、インテリゲンツィアだけにしか理解されない、むきだしの政治的要求でおおいつつむなら、

これはふたたびうしろに向きをかえること、インテリゲンツィアだけの闘争に局限することを、意味するものではないか？ インテリゲンツィアの無力は、たつたいま承認されたばかりなのに。

第一巻「人民の友」とはなにか P347~348

コメント

他党（非マルクス主義政党）を評価し、対応する場合、彼らは非マルクス主義政党であるがゆえに現実を見ない空想性（たとえば、社民党は労働者の生活向上のために民主党と協力することによってその実現を図ろうとしている。）を持っていること、その空想性を事実に基づいて暴露（民主党は資本主義を推進する党であり、資本主義を擁護する党であるが故に、絶対に、労働者の生活を抜本的に改善することは出来ない。そのことを事実に基づいて宣伝する。）することによって現実をリアルに認識させることが必要である。

同時に、マルクス主義者は「労働運動は、労働者階級の利益を完全、かつ全面的につらぬくことを基盤にしてはじめて、資本の召使どもにたいする政治闘争と不可分に融合した資本にたいする経済闘争を基礎にしてはじめて、強力となりうる」ということを彼らに実践的に、事実を持って、示す必要がある。